



放射線リスクコミュニケーション

相談員支援センター だより



広野町放射線相談室
室長 星盛彦さんにインタビューしました



平成 30 年 4 月 1 日に前鈴木室長からバトンタッチし、現在は星盛彦さんが室長を務めています。半年を過ぎ、仕事内容や最近の出来事についてお話を伺いました。

—星さんは今年度から放射線相談室室長になられ半
年経ちましたが、これまでの仕事内容を振り返って
みて、いかがですか。

前室長が平成 30 年度の予定をしっかりと立ててく
れていたのが助かっています。引き続き「地区のつ
どい」とDシャトルの測定を行い、土壌測定も年
2回やっています。今年度から行っていることでは、
10月に檜葉町にある遠隔技術開発センターの見学
等を行いました。

—鈴木前室長には福島第一原発の廃炉状況や飲み水
等を心配されている住民の方が多いと聞いていまし
ましたが、ほかに住民の方から放射線関係で心配ごとを
相談されることはありましたか。

広野町に帰還された方と思いますが、春に庭の畑
で野菜を作るため土壌を測ってほしいという相談
や、初めは総務課に相談がありましたが、浅見川で
孫を遊ばせて大丈夫か、といった相談もありました。

—本年度は学校向けの放射線セミナーも精力的に
行っていっていますが、小学生のお子さんの反
応はどうでしょうか。小学校2年生以下は震災の年
にまだ誕生していないお子さんもいますね。

それぞれ学年によってセミナー内容も違い、反応
も違ってきますね。反応と言っても放射線のことを
嫌がるわけでも、興味深そうにしているでもなく、
淡々と放射線学習を行っているという印象でした。

4年生の児童から聞いた話です。学校給食セン
ターの上に測定を行う場所があり、給食一食分の検
査を毎日行っているのですが、給食を食べる前に「ラ
ンチタイムニュース」と呼ばれる時間があるそう
で、毎日その時間に児童が検査結果を報告するそう
です。

—学校教育の中で給食の測定結果を報告することが
毎日の習慣となっており、主体的な取り組みが素晴
らしいと思います。

ひろの秋まつりにもたくさんのお客様が興味を
持って放射線相談室のブースに足を運んでいたと聞
いています。

当日は放射線相談ブースを担当し、霧箱を展示し
ました。以前、住民セミナーとして小学校の授業で
放射線教育を行ったのですが、足を止めてくれたお
子さんから「授業でやったことがある」と言っても
らったのがうれしかったです。

秋まつり等のイベントは普段の業務では接するこ
とのできない人と話せる良い機会だとも思いまし
た。



—イベントで土日等開催に合わせてのお仕事は大変
ですが、平日に仕事をされている方や主婦の方、お
子様とも会える機会が貴重と言えますね。これから
も活動の幅を広げ頑張ってください。

「東京電力廃炉資料館」で 廃炉の現状を学びませんか

富岡町にあった東京電力旧エネルギー館をリニューアルし、平成30年11月30日東京電力廃炉資料館がオープンしました。資料館のテーマは福島第一原子力発電所の事故の事実と、廃炉事業の現状を地域の皆様をはじめ、国内外に伝えることにあります。

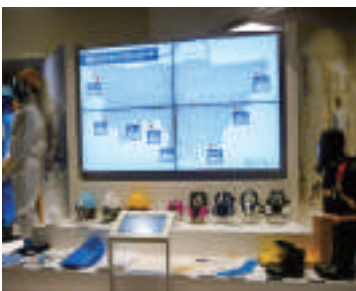


2階から見下ろした「エフ・キューブ」

建物外観は以前の旧エネルギー館のままですが、館内は黒を基調とした落ち着いた色合いの内装となっています。

展示は2階から見ていくよう構成されており、ここでは福島第一原子力発電所の事故が起こり、想定外の状況下が続く中、事故を起こした原子炉をどのように制御していったか、再現ドラマの映像等で振り返るシアターホールを中心に、なぜ事故に至ったかを総括しています。

シアターの映像はスクリーンのみならず床フロアにも映し出されたり、事故の状況を1号機から4号機までの原子炉建屋をベースにAR拡張現実の技術を用いて時系列で分かりやすく見せていたり、事故の経緯と対応を視覚的に説明する工夫が随所に見られます。原子炉圧力容器や建屋のコンクリート壁の厚みが体感できる模型も展示されており、事故がいかに深刻なものだったかが実感されます。2階展示の最後には、電気事業者として東京電力が福島第一原子力発電所事故を起こした反省と教訓も紹介されています。



タイベックスーツ等の展示のほか、第一原発構内モニタリングポストの最新値も確認できます。

1階では廃炉事業の現状として、現場で使用するマスクやタイベックスーツ、未だ放射線量の高い格納容器内の燃料デブリを探索するロボットの実物模型等が展示されており、現場での廃炉作業の現状が実感できます。

見どころは現場の様子を映し出したコの字型の大型パネル「エフ・キューブ」で、内部に入るとあかたも発電所構内にいるかのような臨場感です。

また、1階の一角にはコミュニケーションスペースを設置しており、温かみのある杉材のテーブルとイスが据えられていて、無料のドリンクで一息つくことができます。ここは近隣市町村の情報スペースともなっており、地域の情報も手に入ります。

廃炉の最新情報を知りたいときはぜひ足を運んでみてください。

東京電力廃炉資料館

- 住所：福島県双葉郡富岡町大字小浜字中央 378
(さくらモールとみおか隣)
- 電話：0120-502-957
- 開館時間：9:30～16:30
- 休館日：毎月第3日曜、年末年始
- 入館料：無料（駐車場無料）

9月から12月の 住民セミナー・職員研修・車座意見交換会 開催の概要について

住民セミナーの例

9/22、11/15、12/6 開催
いわき市原子力防災訓練における
放射線教育プログラム

いわき市では各地区毎に原子力災害時における防災訓練を、地域特性を考慮し活動計画の中に組み込んでおり、平成26年度から北部の地区より順に原子力防災訓練を行っています。平成30年度、支援センターではいわき市平窪地区、赤井地区、三和地区、好間地区で行った原子力防災訓練の中で、いわき市総合政策部原子力対策課と協働し、住民セミナーとして放射線教育プログラムを開催しました。

9/22 は平窪地区と赤井地区での防災訓練に、それぞれ、原子力安全研究協会の山田孝一先生と松原昌平先生に、11/15 の三和地区と 12/6 の好間地区で同じく松原先生に講師をお願いし、放射線の基礎、放射線による健康影響と防護に関してお話いただきました。



公民館での講義の様子

左写真:山田先生(原安協) 右写真:松原先生(原安協)

現在は現存被ばく状況として放射線による健康影響が出るほどの放射性物質は身の回りにありませんが、原子力事故等が発生した緊急時は、緊急時被ばく状況として放射線防護の対応を取る必要があります。

放射線教育プログラムでは放射能と放射性物質、放射線の違いや、 α 線や β 線の遮蔽に適切な材質等について学んだ後、放射線防護の3原則である“放射線から「距離を置く」「浴びる時間を短くする」「放射線と人体の間に遮蔽物を置くことで遮蔽する」”ことの必要性を学びました。

参加者からは「いざという時、防災マニュアル通りに進むかどうか分からないので、実際の訓練が重要だと思った」「子供にも聞かせたいので親子で参加できる機会を設けてほしい」との声があり、放射線防護に必要な情報が自治体から住民へ的確かつ速やかに回るよう自治体や地元消防団等と住民と一緒に訓練を行い、原子力災害への防災意識を高める大切さを学ぶ機会になったようです。

職員研修の例

11/27 開催
浪江町職員研修

11/27 に玉川大学教育学部教授の原田眞理先生を講師にお迎えし、浪江町職員研修を行いました。原田先生は臨床心理学等の研究の他、福島県から関東への県外避難者支援活動も行っています。

今回の研修は震災や原発事故による住民の方からの相談内容の変化や業務量の増加により、職員自身がストレスを感じる場面が増加していることから、メンタルヘルスケアについて、個人や職場でできる方法や、住民の方と職員がお互い良い関係を保てる傾聴方法等について教えていただきました。

こころのケアで一番重要なことは「傾聴」ですが、住民の方からの相談に対しいきなり答えを返さずに「相手の方に語っていただく」ことが重要です。その際、相談内容をそのままに受け止めること（「受容」）が大切です。それにより相談者ももっと話そうという気持ちになり、さらに情緒に焦点を当て「共感」することで、相談者の満足感が増します。このような聴き方が“良い「傾聴」”と言えるそうです。

また、こちらから適度に質問することによって相談者の漠然とした考えが整理されていく「交通整理」も大切なことだそうです。



笑顔で参加者に問いかける原田先生

一方で、共感を持って聴くことにより、相談者の気持ちを受け止めた人の心が傷つく二次受傷が大きな問題となります。トラウマは、何か大きな出来事によって引き起こされると思われがちですが、日常業務における相談活動も二次受傷の要因となり、トラウマ反応を起こすことがあります。

また、帰還者は高齢の方が多い傾向にあることから、老年期には喪失体験や避難による生活の変化等によってトラウマ反応が起こりやすいこと等も教えていただきました。

様々な事例を題材に、参加者の積極的な発言もあり、より良い住民対応の方法を具体的に考えることができ、充実した研修でした。



車座意見交換会の例

11/29、30 開催
田村ままカフェ・川俣ままカフェ
車座意見交換会

11/29 は田村市のテラス石森で、11/30 は川俣町のおじまふるさと交流館で、未就学児の保護者を対象に車座意見交換会を行いました。29日は講師に農業・食品産業技術総合研究機構の八戸真弓先生、ファシリテーターは一般社団法人 mama life support Oval 代表の添田麻美さんをお願いし、翌30日は講師に長崎大学の折田真紀子先生、ファシリテーターはチャイルドボディセラピストの松田和美さんをお願いして座談会形式での開催となりました。

ファシリテーターのお二人とも、母親が楽しく育児できるようにサポートする活動を行っており、ご自身も母親という立場です。



どちらのままカフェも、和気あいあいでした

八戸先生には食品の基準値がどのような経緯で決まったか、また、食品中の放射性セシウムが調理や加工で減らせることをお話いただき、普段通りの調理によって放射性セシウムを減らせていること、また、ドライフルーツに加工するとき等は逆に放射性セシウム濃度が高くなることを教わりました。

田村市内では市内で収穫された自家用の野菜・飲用水等を対象とした食品放射能測定所があり、無料で測定を行っていることを伝えると、知らなかった、測ってみることが大事という声がありました。

30日の意見交換会では、折田先生はあえて資料

やスライドを使わずに、参加者に質問を投げかけながら放射線についての言葉の意味や確定的影響・確率的影響等についてお話ししました。

例えば、「放射性物質はいつか無くなるのか」との質問に対しては、放射性物質の種類によって半減期が異なり、福島県内の主要な残留放射性物質であるセシウム 137 は半減するのに約 30 年と時間がかかるため長期間モニタリングが必要であることを説明しました。

また、校庭下に埋められた除染土を運び出す計画の話の際に、「フレコンバッグにはまだ放射性物質が入っているのか、作業中の土埃が心配」との質問に対し、半減期のため放射性物質は当時より減っていること、フレコンバッグが破れない限り環境中に放射能が漏れ出す恐れはなく、フレコンバッグ内の土の粒子を吸い込むようなことがなければ現状では全く心配ないことを説明しました。



今回の車座意見交換会はこちらも託児を設けずに小さなお子さんもお母さんと一緒に参加しましたが、他のお友達とも仲良く過ごし、和やかな雰囲気の中に車座意見交換会を終了することができました。

参加した方からは、「広報等でベクレルやシーベルトの単位を目にしても良くわからなかったが、今回説明してもらい、やっと理解できた」「日常的に食べる食品の安全がわかって安心した」「家族や親せきが震災後に癌になったことを、親が“放射線のせいではないか”と気にしていたので、そうなのかもしれないと思っていたが、放射線由来ではないことがわかり、安心した」という声、いろいろな話が聞けて良かったという言葉いただきました。

支援センターでは今後もお子様をお持ちの保護者の方々に対し、気兼ねなく放射線について話ができるようサポートをしていきたいと思っております。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.17

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町2-6
いわきフコク生命ビル5F

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

